

王・圃三郎をして之を殺さしむ(本領曾我)
 南都の偵兵に交りて、平家の討手難波・妹尾の軍を悩まし、また平家追討の院宣を申受け、源義朝の體を擧へて頼朝に謁せんとし、伊豆國蛸が小島に下る途中駿州宇都山にて居眠り、源氏が平家を討滅したるを夢む(平家女護身)

やげんじ 天日嗣源次。給師野氏久の曾なり。橘右大臣官房公の馬方となり、伊賀越にて金岡に出遇ひ、相共に逆日王子の殿中に亂入して王子を滅す(天智天皇)

やごらう 刷毛彌五郎。河内屋與兵衛の友なり。野崎觀音聖詣の途中、遊女小菊を連れたる倉津者の郎九と喧嘩す(女殺油地獄)
(刷毛は、刷毛長(煥客)などに流行した結髪)をきかせた渾名である)

やさざあもん 本田彌三左衛門。東の高家入間殿の奥家老なり。丹波領主由留木侯の女しらべの姫を迎に來り、姫に陪從して歸る途に、伊勢國開の宮にて馬追三吉綿盜して捕へらるるや、しらべの姫の乳母澁野井の愁歌を察して三吉の罪を赦す(丹波興作)

やしちらう 印南彌七郎。賀古川民部少輔膳原孝房の家士なり。賀古に歸つて孝房熊野浦にて難船に遭ひ溺死したることを報告す。かくて後慈満の熊源太兄弟と闘つて之を搦む(賀古教信七墓詞)

やしふらう 小西彌十郎。堀の養理商小西如清の子なり。放埒なりしかば父より勸當せらる。彌十郎乳守の遊女小嬢と馴染む。或日加藤虎之助正清が小嬢を高島屋に擧げ、小嬢の所持せる朝鮮地圖を懇請せるを聞き、彌十郎その地圖を奪はんとして正清と格闘せ

しが、小嬢の仲裁によりて兩人相和し、正清の推屬によりて眞柴肥前大領久吉の部將となり、正清と共に朝鮮征伐の軍に従ふ(本朝三國志)

やしゆだらによ。耶輸多羅女。阿私大臣の女にして才色秀絶なり。十七歳の時悉達太子に嫁す。或日太子と共に蝴蝶の戯るるを見て櫻姫す。太子出家するや、耶輸多羅女は吉祥女を伴ひて其姫を遣はんとし、門前にて伯了頼の難に遭ひ、恒河橋上にて提婆達多の火攻めに遭ひ、鳥陀裏に救はれて相共に太子を尋ねて檀特山に赴く。釋摩大悟し給ふを見隨喜の涙に咽ふ。摩訶迦葉より授戒を受け、子の羅睺羅と共に剃髮して比丘比丘尼となり、釋尊涅槃の場に至る(釋迦如來誕生吉書)

やすきよ 二宮太郎安清。曾我兄弟の姉姪なり。建久四年五月富士府の時鎌倉の留守役を命ぜられ、高橋を作りて見張中、二十八日の深更富士郡野の方に提灯が明願に馳過ふ様を察して見張の使者を出す。折しも鬼王圃三郎が曾我兄弟の形見の品品に文を添へて持ち歸る。安清の室直に其封を切らんとす。安清之を制して己が心中を語る。是時使者歸つて、曾我二子が其亡父の仇工藤龍經を殺したるを報ず(曾我虎が懸)
 源頼朝が富士府に出でたる留守中、源範賴の自刃及び曾我二子が富士野の岩場に紛れ込みし注連の早打を命ぜられ、猿谷四郎重朝野心を抱き、安清の妻は曾我の縁者なれば、安清を使者たらしむべからずと主張して己其使者たらしめんとす。是に於て安清は妻を離別する状を書きて之を白崎八平次に渡しに出發し、藤

澤の驛にて根原景高等に妨害せられしが、禪師坊の盡力によつて事無きを得たり。かくて曾我祐成假屋に亂入して、刃を石にて叩潰したる刀にて格闘す(曾我會稽山)

やすすけ 藤原保輔。平井保昌の弟なり。源頼光に見棄てられて素浪人となり、兎賊將軍太郎良門に一味し、江文の宰相爲成の邸に闖入して、駿馬の鬃を奪はんとして坂田公時に殺さる(原州鞍馬)

やすひら 伊達二郎安衡。陸奥守藤原秀衡の次男なり。兄錦戸太郎國衡等と謀り、鎌倉の命を奉じて義經を討たんとす。然るに弟某三郎忠衡を守つて其意に従はざりしかば、まづ忠衡を擧撃し之をして自刃せしめ、進んで義經を高館に攻破り、義經、辨慶が蝦夷に落ち延びたるを追撃し、戰敗れて死す(源義經將茶經)

やすもり 平安盛。常陸介となり平家の將なり。花山帝に中納言高房の女三の宮を勸め、宸筆の御書を携へて三の宮を迎に赴き、尻橋にて渡邊綱と取ひ、金時に毆打せらる。安盛また右近の前に弘徽殿女御を誘るやう言合めて、之を帝の御伽女に奉る。然るに安盛が右近の前に言合めたることを覺して帝の逆隣に觸れ、渡邊綱に縛せられて源頼光の前に引出さる(傾城酒吞童子)

やそたける 八十臈師。筑紫の首領にして王命に従はず。重臣阿蘇羅連を使者として、景明天皇第二の宮神賢臣の御降嫁を奏請して、吉備國彦の妹歌妙を神賢臣と信じて結婚の式を擧げしが、歌妙が己を狙へるに氣付き之を刺して第二の宮に斬付けらる。臈師痛手を堪へず、宮の武勇を歎賞して日本武尊の御

名を奉り、今より我は尊の臣下なりと語つて自刎す(日本武尊吾妻鑑)

やどりぎ 宿木。長田庄司忠宗の女にして鎌田兵衛正清の妻なり。正清主君源義朝に従ひて尾張に下り忠宗を便る。然るに忠宗平家の恩賞に預らんとして子の景宗と謀り、義朝及び正清を騙討せんとす。宿木陣子を隔つて之を聞き深く悲しむ。かくて忠宗が正清を襲する酒宴の席に出席し、能と酔狂するやに見せて、泣きながら暗に夫に注意を促し、酒を飲ましめざらんとすれど正清覺らず、遂に忠宗の術中に陥つて殺さる。宿木狂亂となり。二子に忠宗の惡逆を語つて忠宗に殺さる(鎌田兵衛名所丞)

やはた 八幡三郎。工藤左衛門前經の下人なり。主命により白鹿を獲んとして犬坊丸と共に山に入り、曾我十郎祐成を見付けて之を捕へんとし、祐成に化けたる白鹿に打撃さる。また河津三郎が股野に投付けられたる状を描ける繪の後に隠れて河津を罵罵して朝比奈義秀に投付けらる。後京小二郎の手引に、曾我兄弟を大儀の遊廓に擧はんとし、鬼主兄弟に擧められ曾我兄弟に首を刎ねらる(曾我五人兄弟)

やへぎり 八重桐。荻野屋の遊女なり。坂田藏人時行と馴染みて夫婦となる。時行亡夫の仇を報ぜんとして夫婦離別す。或日八重桐、源朝姫の邸前を通りかかると三味線の音に耳を惹き、尋で時行と邂逅し、源朝姫の間に應じて我身の上を語り、時行の薄情を語りて意見す。時行身を恥て自刃し、其屍塊火焔の輝風となつて八重桐の胎内に入る。八重桐之より飛行通力の女となり、清原右大将高

藤の寄手を追拂ひ雲を分けて去り、山姫となつて信州上野の山に棲息し快童丸を生む。偶源頼光に遇つて快童丸を語り、快童丸を頼光の家來となし、暇を告げ山を断廻りて行方知れずなりぬ(龜山姫)

(序云この名は當時の俳優源野八重桐に因みたるなり)

やへびめ

八重姫。伊東次郎祐近の女なり。源頼朝と契りて千鶴丸を生む。祐近平家の聞えを懼りて千鶴丸を殺し、なほ頼朝をも害せんとす。頼朝遁れて北條時政に頼る。八重姫・頼朝の後を慕ひ行きて、北條時政の番所詰膳内・黒塚與市に刺殺さる。是に於て八重姫の怨靈頼朝、朝日の前に祟りしが、文覺上人の祈禱によりて退治せらる(頼朝伊豆日記)

やまくに

荒金刑部山國。坂上田村麿の家老なり。出仕して福引の枕を鷹川藤人秀治と引合ふ。田村麿の室戸の前其枕を切つて己に匿名を懸書を送りし者を吟味す。山國乃ち秀治に冤罪を責はしめしが、己が清水親善の寶藏の壁に書きし筆蹟よりして己が罪惡發覺するや、直に岩戸の前を搦め暴行に及ばんとして秀治に追拂はる。後に己が部下と共に襲撃して土山に下り、岩戸の前一行を要撃し、戦敗れて殺さる(田村將軍初親書)

やまたけのめこと

日本武尊。景行天皇第二の皇子なり。御兄大碓王子・皇妹なりしかば、父の天皇尊を皇子として育てば、遂には大碓王子に害せられんことを懸念せられて、神賢姫と名付け女のやりに見せて育てらる。筑紫の首領八十梟帥・神賢姫の御陰嫁を所望す。是に於て神賢姫は吉備國彦及

人名部

び園彦の妹敷妙を連れて筑紫に下る途中、三草河原にて筑波長脚の軍に要撃せらる。尊即ち靈殿にて賊を破り、筑紫に下りては敷妙をして神賢姫と稱せしめ、尊は其從者となり八十梟帥に近付いて梟帥を斬る。梟帥痛手に堪へず、尊の勇武を賞讃して日本武尊の尊號を奉る。また尊は東夷征伐を思ふも給ひ、尾張に下つて源大夫の家に頼られ、源大夫の女媧姫と契り給ふ。尊野原に至られし時、東夷の巨賊外濫忍熊尊を欺きて野原に墮き奉り、四方より草を纏立てて尊を試せんとせしを、尊劍を抜いて草を雜拂ひ、賊を滅して凱旋し給ふ(日本武尊吾妻鑑)

やまひこわろし

山彦王子

敏達天皇の同母弟なり。外道の法を信じ、其流布を厭策して、花人親王が佛法流布を主張せらるるに反抗し、互に法力を比べて負け給ふ。是に於て外道の道士伊賀留田のますら等と謀り、花人親王を玉世姫の家に騙らる。丹州大江山の麓に土城を築きて據られしが、丹州皇子の軍に攻められて滅ぶ(用明天皇職人鑑)

やうらめ

村上天四郎義光の妹なり。狂女を装ひて成良親王が桐が谷に幽閉せられ給へるを訪ひ、親王をして縛に連れしめ、名張八郎爲勝と共に大庭前司の兵と戦ひ、親王の跡を尋ひ行く(磯入道千足大)

ゆかあもん

磯邊床右衛門。因幡の藩士なり。相後小倉登九郎の妻お種に懸想し、之を眺みて拒絶せらる。後刻再びお種の父忠大夫と名乗つて来る。其夜お種官地源右衛門と不義に陥る。床右衛門二人の袂を掴む。源右衛門袂を切つて逃ぐ。床右衛門二人の袂を奪ひて不義の證となし、お種が己の意

に従はざるを意趣にお種源右衛門の姦通を言觸らす(堀川波鼓)

ゆき

阿波の土平岡左近の妻なり。男装し左近と名乗つて、扇屋の名妓夕霧を井筒屋に擧げて其心を試し、夕霧の生みし子を養ひ、夕霧を譲出して其乳母たらしめんとし遂に成らざる。かくて後に夕霧の病室の際金を贈りて之を譲出さんとする(夕霧阿波鳴渡)

ゆき

阿雪。川側伴之丞の妹なり。出雲姫主の妻小姓笹野権三と感動を通ず。権三に遇うて結婚を迫り、また心を籠めて縫ひたる帯を贈る(鐘權三重権子)

ゆきうち

海野小太郎行氏

源頼朝の臣なり。武藏坊辨慶の父辨直と名乗る老入道領を捕へ、其實として頼朝の名馬松島月毛の拜領を請ひて仁田四郎忠常に妨げらる。また大藏の遊君虎御前の體胎を詮議して忠常に誑さる。かくて何か功名せんものと思ひ、辨直を害して鬼王兄弟花野を捕へて吟味するを、曾我頼政に託されて免死す。曾我二子父亡の誓を報じて罪に就かれぬ後、曾我二子の弟禰師坊を捕へて頼朝の前に引く(百日曾我)

ゆきえ

吳服中將雪枝

宮中の美女陸奥局に密通して勅勅を蒙り、故三位侍人富士丸の娘瀧姫と通ず。或日堺大寺なる富士丸の墓に詣てて其身の罪深きを感じ、瀧姫をして己を思ひ出しめん爲、家人金目丸に自害したる由を言合めて之を瀧姫、家人金目丸に諸方をさまよいて陸奥局の閑居と知らずして立寄り、互に奇遇を喜んで往時の戀物語をなせる際、瀧姫雪枝を尋ねて来る。宇治太郎・雪枝を殺さんとして來れるを、陸奥局の機軸によつて雪枝を逃す。かくて後宇治太郎等滅び、

雪枝は播磨姫路の小次郎狐に誘はれて齋藤王の御前に出で、勅勤御免ありて本領に安堵し瀧姫と結婚の式を賜ふ(天鼓)

ゆき

雪枝が陸奥局と往時の戀物語するは、傾城佛の原(元祿十二年作)第一に、梅永文隆が昔馴染の傾城奥州に其人と知らずして、諸語交りに戀物語するを淨瀧瑠に改作したるなり。

ゆきなが

吳服小六郎雪長

雪枝の弟なり。笛を吹きつつ京中を歩き、太見縣主時賢の女夕映と戀仲となり、夕映より雪枝及び其愛人瀧姫の行方不明となれるを聞き、其行方を尋ねて松垣親人與宗方に瀧姫と逢ふ。松垣友妻は江州月の輪小左衛門狐に誘引せられて齋藤王に謁し忝き御説を賜はる(天鼓)

ゆきひさ

中臣大納言行久

夏仁親王の加長歌に降從して詔田明神に詣て、神主鳥居三位に追拂はる(持統天皇歌軍法)

ゆきひら

在原行平

日の御座の劍を詔宮に奪はれ、また諸王の子を若宮と稱せしかば罪を得て須磨に幽居し、その地の磐松風と契る。また松風の妹の村雨を慕ひ寄れるを件健康に只付けられ捕へられしが、寒平によつて免るを得。松風・村雨が、龍官より寶劍を取返せしかば行平の罪を赦され、中納言兼民部卿に任じ、廣澤池畔に竊狼の狂言を興行して頭神を慰む(松風村雨東帯鑑)

ゆきふさ

吉田少將藤原朝臣行房

山王権現二十一社修造の勅命を奉じ、家來の

藤正武國と共に熱心に木材を集めしが、普請奉行常陸大掾百連に難ぜられ、また百連に同心せる行房の逆臣割御由兵衛邊が比良嶽の材木を伐出せし爲、天狗の祟を受けて行房の祟影の病に罹る。行房、天狗を刺さんとて謀つて己が妻を刺す。かくて後妻の班女と共に舟を泉水に浮べて遊び、際草邊に刺殺する(養生隈田川)

ゆげひ 膳負

聖徳太子の妃片桐姫の兄なり。大連物部守屋の立花の會に連れて行き、守屋より叛逆に一味するやら諭されて拒絶し、數作數手を斬つて守屋に殺さる(聖徳太子繪傳記)

ゆふざり 夕霧

大阪新町九軒町の遊廓屋敷の名妓なり。藤屋伊左衛門と馴染みて源之介を生む。伊左衛門親の勘當を受け、放逐せられて落魄するに及び、夕霧乃も源之介を平岡左近の胤なりと稱して左近に養はしむ。左近の妻響が夕霧を誦出して源之介の乳母となさんとし、源之介は伊左衛門の子ならんと發覺し、源之介と共に左近の邸を放逐せられて屋敷に復歸す。夕霧病篤し。伊左衛門源之介を伴ひて、屋敷に夕霧を見舞ふ。是時伊左衛門の母妙順金二千兩を贈りて夕霧を誦出す(夕霧阿波鳴渡)

大阪新町九軒町の遊廓屋敷の名妓なり。南都の樂人拍入京進盛光と馴染んで春姫を生む。延寶六年正月六日二十二歳にて病歿す(年齢歴年など事實に據れり)。後に夕霧の妹女郎の萩野に供養せられ、梓巫女の口寄にかかつて、死後地獄道に墮して苛責に苦しむことを語り、我子の春姫を慕ひて失す。春姫下寺町淨園寺なる夕霧の墓に詣てて回向して墓側に眠り、夕霧が惡鬼に攻められて劍の山に登るを夢む。帝夕霧のことを聞召され、京都誓願寺にて夕霧の供養を行はせ給ひし時觀世音となつて出現す(三世相)

ゆふばえ 夕映

太見縣主時景の女なり。難遊の節に吳服小六郎善長と遇ひて戀仲となり、相共に吳服中將實枝及び過海姫の行方を尋ね出づ。後に富田林の與九郎狐に誘はれて寶親王に謁し、忝き御説を賜はる(天鼓)

ゆや 熊野

遠州池田宿の遊女たりし頃河津三郎祐重と馴染みしが、平宗盛の嬖妾となり、股野五郎兼入に懇懇せられて其意に從はず、祐重と共に東路に下り、再び池田の遊女町にて全盛を張りしが、狐つよといひ難病に罹りしを、文童上人の祈禱によつて平癒す。和田義盛の室に招かれて花見の宴に赴き、曾我内室の不貞を罵る。是に於て内室肌衣を脱ぎて五條の袈裟を見せ、妾が心は尼法師なりといふ。熊野も肌に着たる袈裟を見せたり其心底を現はし、友切丸の劍を出して之を土産に墮らんとす。是時兼入に所望せられて舞を舞ひしが、兼入が友切丸を奪はんとするを察し、劍舞の亂拍子を以て兼入を追拂ふ(本領曾我「つな」をも見よ)

ゆら 由良太

龜彦庄司の子なり。蟹の松風を連れて歸り、葎丸に難はれて之を破

り、また伴健宗と戦うて之を殺す。功を以て菅川の庄三百餘町に封ぜらる(松風村雨東帯篋)

ゆらのすけ 大星由良之介

鹽谷判官高貞の臣にして八幡六郎と云ひしが、高貞が高武藏守御直に讓せられて切腹したる後、浪人となりて大星由良之介と名乗り、京の閑居して團扇などの遊興に耽り、主君の仇討の事を忘れし如く装ふ。或日殿上にて基石を列べて岡平より敵の屋敷の様子を聞く。由良之介の母妻は由良之介の放埒を意見し、主君の仇討を勸めて自刃す。由良之介兼倉に下り、文倉三年の冬同土四十七人と共に高師直を喰飯島原の原敷に襲ひ、師直を斬つて主君の仇を報じ光明寺に引上げ、從容刑に就く(基盤太平記「ろくろ」をも見よ)

ゆりわかだいじん

「わだまる」を見よ。

よいち 黒塚與市

北條時政の番所詰を勤め、八重姫を殺して金を奪ひしが、八重姫の怨靈に祟はれて死す(頼朝伊豆日記)

よいち 人見與一

北條の家臣なり。三河國天胡畑に行きて淨瑠璃姫に會ひ、鎌倉にて人形藝を演ずべしとの頼朝の命を傳ふ(源義經・赤糸巻)

よこぶえ 横笛

加藤兵衛氏駒の女なり。賀茂安樂花の見物に行き、北白川の廣文に匂引されて江州鑪山の遊廓於屋長に賣られて売となる。或日父の尋ね來れるに遇うて身の不幸を嘆す。長が能樂を催せる際際にて遊女白妙の病氣を見舞ひ、白妙の愛人吉助を導き白妙と逢はしめたるを、長に見付けられて苛責を受け、悲憤に堪へずして自刃す(傾城酒呑童)

よこぶえ 横笛

建禮門院の侍女にして、平重盛の家士藤原口頼方と相思ふ仲なり。或日頼方が重盛の使者となり來つて山雀を建禮門院に獻す。横笛之を取次いで頼方が戯れ、過つて山雀を籠より逃して加賀郡師高に罵責せらる。養和元年九月北山に葎野の御遊ありし夜、頼方と被奪せらる師高に見付けられ、師高の奸策によりて死罪に行はれんとしたりしを、建禮門院の仁心によりて救はる。これより頼方の行方を尋ね、鎌倉の裏なる庵室に至りて、頼方の朋輩左京之進義次に、漸く家を見付けて宿を請へる間に鎌倉に死す。然るにこの家は頼方の宅なりしかば、頼方等怨歎に暮るる際、刈藁が燻れたる尊王香によつて横笛蘇生し、志賀辛禰大明神に参詣して、建禮門院より横笛等召還の使者戸無衛門に遇ひ、相共に都に上る(娘歌加留多)

よさく 伊達與作

丹波領主中留木侯に仕、登甲せられて妻者役番頭千三百石に取立てられ、侯の侍女遊野井と戀仲となつて子與之助を設く。後に江戸の邸に勤仕し、放蕩の爲に改易を命ぜられ、落魄して馬追となり、關宿の出入小方八藏と馴染み、馬方八藏と賤稱し賣つて喰す。時に馬追本三吉、由留木侯の女しづへの姫君の馬を追うて關宿に泊し、與作に教唆せられて姫君の金袋を奪ひ、夜廻の侍に見付けられて捕へらる。是時與作は三吉が我の與之助なるを知り、懇歎に暮れ小萬と共に死せんとし迷ひ出すが、遊野井しづへの姫君に救はれて土籬に復す(丹波與作)

よし 阿吉

長柄の農夫介右衛門の子にし

て、市郎右衛門の妹なり。天満屋の遊女お島より市郎右衛門に送らるる手紙を受取りて父に奪はる(心中二枚繪草紙)

よしあき

足利義昭。足利將軍義隆の弟なり。

大官大納言秋忠使として義隆の邸に来る。時に義隆は九條町の遊郭に流連して不在なりしかば、義昭兄に代りて使に謁せしを三好長慶に罵られ、更に野心なきを言明し、誓を切つて通世の身となる。かくて後、三好長慶叛逆を企て義隆を弑す。義昭夢に京町千疊敷に遊ぶ。是時義隆の遣臣淺川左京大夫藤孝等諸國の義兵を催して來會し、三好長慶を朝日の岡の館に襲撃して之を滅す(津國女夫池)

よしかど

平將軍良門。平將門の父なり。

幽霊となりて忠心に逐ひ、將門の爲に己が死骸の兩眼を抉出され、耳鼻舌を切られて草薙に包まれ、多身遁の法を行はれしによつて障道に墮し、將門と共に七人の同じ姿と變じて苦患を受く。眞の將門は額の髻谷に筋脈あれば、それを目當に將門を謀めよと語つて消失す(傾城物語)

よしきよ

村上左衛門義清。信州の國守なり。

長尾藤虎の女衛門姫を横暴暴し、柏尾玄蕃を使者として藤虎上洛の歸途を大津に

待受け、普物を出して衛門姫との婚約を申込んと峻拒せらる。義清甲州の民を苦しめんとして甲州に亂略を送るを察し、自ら妖怪に變装して天目山に僧立を祖ひしが、勝頼に斬られて滅ぶ(信州川中島合戦)

よしだ

新田義貞。青雲を刈り盜む二十餘歳の女を捕へて、その女に感じ親を與へて放免す。生田原の戦に小山田太郎高家

を祖伏せ、其者たる細の誓で女に與へたるものなるを見憐んで之を助く。かくて後に吉野の内裏に至り、尊氏と和睦することとなる(吉野郡女備)

よしすけ

吉助。右馬之九といひ、北白川の廣文の子なり。

幼時西國商人の養子となり、江州磯山の遊樂、終屋の松被白妙と馴染む。白妙病篤き時芳の横笛に導かれて白妙を見舞ふ。白妙これが爲に抱主より憔悴なる奇責に遭ひて自刃す。吉助怒つて抱主を毆打せんとし、辨明等に辨り据えらる。是時廣文來つて、横笛を勾引して抱主に奪りたる前非を悔いて自刃す。吉助悲歎の涙に暮る(傾城酒呑童子)

よしすけ

「よしすけ」を見よ。

よしづく

左京之進盛次。平重盛の家士にして越中次郎兵衛盛次の弟なり。

養和元年九月北山に菅狩の御遊ありし夜、建禮門院の侍女刈瀧と密會せるを、加賀郡司師高に探出されて悪評を立てられ、兄の盛次に幽閉せられ、師高の奸策によりて死罪に處せられんとせしが、重盛の仁慈によつて救はれ、僧となつて嵯峨の奥に住む。或日横笛、横方を尋ねて來る。是に於て相共に横方を尋ねて雪中にさまよひ、一家を見付けて宿を請へば、これぞ頼方と刈瀧の住所なりしかば、互に奇遇を喜び、連立つて志賀新崎大明神に参詣し、戸無瀬局の難を救うて師高を捕め、師高の部下若村源九郎、鎌倉無業を斬る。是時盛次尋重盛より召還の使者となつて來るに遇ひ、相共に都に上る(娘歌加留多)

よしつね

源九郎義經。源頼朝坂東八國の兵を率ゐて都に上ると聞き、奥州勢十萬餘騎を率ゐて來會する途中、三河國峯の樂師に参詣し、淨瑠璃御前の侍女の冷泉十五夜等に逢うて、淨瑠璃御前の死を聞きて其卵塔に水を手向け、法華經聖要品を讀み上げれば、卵塔忽ち碎け光明焔灼として淨瑠璃御前成佛の相を現す(源氏冷泉節)

兄頼朝と不和となりて奥州に下り藤原秀衡に頼る。秀衡死して一周忌に其善處所に参詣し、秀衡の後室尼公に遇ひて身の不遇を歎す。また忍の前に出遇うて、忍の前が夫泉三郎忠衛の命を奪ひて義經を高館に擄ふや、義經に遺言して血路を開き、蝦夷に落ち延びて敵馬大僧正に邂逅し、其助勢を得て辨慶と共に國衛等追擊の兵を破り、仙となつて淨瑠璃の居

る淨瑠璃世女護島長生殿に入る(源義經將基經)

京都九條北町柏屋の遊女若紫の色香に溺る。三保谷四郎國時、義經の討手して京に上る。兼房等之を察して義經を誅め用ひらる。是に於て佐藤忠信、若紫の客となりて、若紫を義經の席に出さす。偶國時も柏屋に登樓し、計らずも義經、忠信、國時顔を合す。義經は忠信を邪推し、勘當を甲斐して堀川の邸に歸る途中國時に要撃せられ、辨慶、片岡國言して之を破る。かくて後義經は北條時政の言に従ひて都を開き、大物浦より乗船し四國に渡らんとし、暴風に遭ひ、住吉浦に漂着す。之より吉野を指して分入り、辨慶の言に従ひて、靜御前に形見の品を與へて京に歸す。吉野山の大衆義經が山中にあるを知つて之を圍む。佐藤忠信諭止り九郎判官と名乗つて戦ひ、以て義經主従をして遁れしむ(吉野忠信)

梶原平三景時の謀によつて兄の頼朝と不和となり、京都堀河の邸に住して平時忠の女御前を妻となす。或日御辨慶等を伴ひて北野天神社に詣て、神樂堂の藤に隠れたる土佐坊昌俊を見付けて之を訊問し、起請文を書かしてて放免す。其夜昌俊は堀河の邸を襲撃せられ、義經の部下亂戦して敵を破り昌俊を殺す。これより義經都を開き、靜と別れ奥州の藤原秀衡に頼らんとし、主従十二人修驗者の姿となり、安宅關を通過せんとし、関守富樫左衛門家直に始められし其同情によつて無事に通過し、藤原秀衡に頼る(源頼朝内侍)

奥州より平家討伐に上る途に佐藤庄司の二子經信、忠信を臣となす。犀島合戦に經信が義經の身代となり、能登守教經の矢を受留めて斃るや、義經深く哀悼し、新黒谷にて經信

の追善をなし、繼信が生前望みし名馬大黒を手向く(津戸三郎)

よしとて 足利義輝。足利十三代の武將にして方大臣一位征夷大將軍たり。京都九條町の遊女大花の色香に溺れ、大淀を請出して邸内に引入れ、日夜遊興に耽りて政務を顧みず、暴戾の行多かりしが、遂に三好修理入道長慶に弑せらる(津國女池)

よしとき 江間小四郎義時。五百餘騎を率めて景清を清水寺に襲撃す(出世景清)

よしとも 源義朝。保元亂に平清盛と共に後白河帝の御味方に馳参じて崇徳院の軍と戦つて之に勝つ。而して父の爲義が清盛に捕へられたるを赦免を請ひて清盛に逃られて無念に堪へず、清盛を討取らんとして勝たず、鎌田兵衛正清等と共に尾張に落ち長田庄司忠宗に身を寄す。忠宗、義朝を殺して平家の恩賞に預らんとし、義朝を留の茶屋の樂湯に導きて之を刺さんとす。是時鎮西八郎爲朝來合せて義朝の危難を救ふ(鎌田兵衛名所置)

よしなが 又五郎義長。蔡中衛士を勤め、藤壺女御の侍女清瀧に懇懇し、浪人となりて近江國に居りしが、藤壺女御の殺害せられたるを聞き、清瀧の歎を思遊り、都に上りて按察左大將早岑の普請人足に罹はれ、傍に清瀧の行方を聞かんとす。折しも早岑より花山天皇を弑し奉るやう預まれて辭し難く、坂田金時を變装して白川なる弘徽殿女御の邸に赴き、蘆屋道滿が祝祭の瓜茄子の變化を退治す。是時刀を掲げて闘入する者あるを近寄り見れば、清瀧なりしかば互に奇遇を喜びて心中を語り、天皇の御味方となりて黒壁權大夫等を追捕ひ天皇を救ひ奉る。また弘徽殿女御

が桂川に投身せんとするを救ひて、男山八幡宮の寶殿の東の間に隠し匿き、重指を携へて見舞ひ安倍晴明に運送す。時に蘆屋道滿等に監禁せられ奮戦して道滿を殺し、弘徽殿女御を都に移し、伊賀介久國を連れ、按察左大將早岑の城下へ赴き、八國をして敵を欺かしめ、源頼光の四天王と共に早岑を攻めて滅す(弘徽殿鶴羽遊家)

よし の「わごんのまへ」を見よ。

よしのり 足利義教。足利六代將軍なり。赤沼幸滿の逆心を覺らず、招かれて其邸に行きて印判を預け、斯波義將に諫められて大に怒る。幸滿反し、義教亡命して斯波義將等に救はる(聖女五枚羽子板)

よしひて 朝比奈三郎義秀。新開荒四郎が名馬松島毛を奪きて新田忠常を訪ふ途に義秀其馬を奪ふ。忠常が頼朝に請ひ、高名に代へて頼朝坊を助けたる時、義秀喜んで松馬毛を忠常に返す(百日曾我)

よし 曾我あり。工藤経経が物言ふ繪を畫かしむべしと言へるを聞いて口論し、後に繪の後に隠れて物言へる八幡三郎を捕んで投付く(曾我五人兄弟)

和田義盛の子にして曾我あり。井原經景が頼朝より拜領したる舞鶴の紋所に就いて、經景及び工藤経経と口論し、經景と途に遇うて馬の足に掛けて口論す。經景舞鶴の紋披露の祝宴を大儀の遊郎部軍屋に張る。義秀乃ち經景の蹄塗を要せんとして曾我時宗に逃らる(曾我扇八郎)

御所の五郎九と腕力を格して投げし、和田義盛に其相鬪を叱責せらる。或夜秩父重保と共に大磯遊郎に虎小將を擧げて遊樂す。折しも

曾我師成が工藤経経の味多勢に襲撃せらるるを見て、遣手し變装して之を追捕ひ、祐成をして八幡三郎の首を刎かしむ。後に曾我時致が五郎九に捕縛せらるるや、義秀乃ち時致を要めて五郎九を振殺す(曾我虎が懸)

能樂の臺中に大坊九と喧嘩す。また元服の式を指提提行て行ひ、箱王と驛馬の引合ひをなして箱王の力量に驚き、且深く同情す。箱王が工藤経経と口論するを聞き、経経を辱かしむ。祐經の弟伊豆二郎祐兼が曾我二子の愛人虎少將を擧げ行かんとするに出遇うと祐兼を辱かしむ(加増曾我)

よしひら 惡源太義平。源義朝の長男なり。保元亂に父と共に後白河帝の御味方となりて崇徳院の兵と戦ひ、爲朝と格闘して勝負決せず。後に尾張に下つて長田庄司忠宗を捕縛し、鎌田正清の二子いや、石いや若を伴うて義朝に逢ふ(鎌田兵衛名所置)

よしへ 由兵衛。大阪安堂寺町に住し、葦屋座の主人なり。大川に舟遊びせる際、葦屋の手代二郎兵衛に毆打を授けられして怒り、二郎兵衛を毆打せんとしして過つて待に無禮を加へ、侍よりいたく毆打せらるる(よしへる)の條を見よ(今官心中)

よじへ 山崎與次兵衛。藤屋の遊女吾妻と馴染む。葦屋座介も吾妻を戀慕して與次兵衛に懇め。差介・雌與平に斬られしを與次兵衛に断れと叫びしが、吾妻と共に罪を藏りて家に幽閉せられしが、吾妻と共に出奔し、雌與平に救はる(靈門松)

よしまさ 斯波左衛門義將。管領職を勤む。足利將軍義教の身を氣遣ひて赤沼幸滿を訪ひ、中川の幽靈に遇ひて赤沼父子の逆心

を知り義教を誅む。義教大に怒り細川勝秀に命じて義將を討たしむ。義將目刃せんとす。勝秀之を制して其心事を鑑き相和して別る。かくて後に義將勝秀共に赤沼父子を攻めて之を誅す(聖女五枚羽子板)

よしあもん 雜賀屋與次右衛門。神谷宿の商人にして花之丞お梅の父なり。お梅を京都三條鳥丸美濃屋左衛門に嫁せしめんとし祝宴を張る(心中萬年草)

よしとて 吉岡。貧家に生れ、母の病氣を救はん爲身を賣りて江戸吉原遊郎三浦の内の遊女となり、憲法と馴染みて久吉を生む。憲法財産を盡盡して行方不明となりしかば、吉岡は父と共に久吉を連れて京都に來り、憲法を尋ねて三人路頭にさまよひ、三味線を彈じ唄を詠ひて恵を往來の人人に乞ふ。偶來雀にて憲法の母に遇ひ、また大阪三軒屋町にて憲法に邂逅し、やがてこの町の御手洗屋に身を賣ることとなる。其後石川五右衛門押入り吉岡をして連れしめんが赦免せらる。五右衛門捕縛に就くに及んが放免せらる。五右衛門久吉を養ひたる鐵釜煎の刑に處せらるるや、吉岡刑場に來つて懇歎に響る(傾城吉岡染)

よそへい 四十平。但馬城主の京都の邸に仕へ、中間頭の番頭となる(薩摩歌)

よつきごぜん 世繼御前。勅命によりて平朝臣惟茂と婿することとなり、剛毅帶刀太郎廣房を伴ひて入るの際、誤つて金剛兵衛利判に娶せられて其家に養はる。或日惟茂と珍瑠君と共に手紙を得て、互に嫉妬せしが心解け、相共に金剛兵衛・濃湯二郎を連れ、惟茂を尋ね近江路を経て信州に下る。時に九

月二十餘日。戸隠山にて惟茂と逢ふ(花符)
よのすけ 世之介。牛若丸が通那王と稱して鞍馬山にありし時、鞍馬の犬天狗僧正坊其色香に迷ひ、姿を變じて通那王の奴となり世之介と名乗つて衆道の縁を結ぶ。平家の公達鞍馬山に櫻狩の宴を張りし際、通那王宴席に入つて狼藉に及び、既に危からんとせしを世之介介ち僧正坊と變じて平家を追拂ひ、通那王に三略の秘書を授け、名籍を惜みながら雲井に飛去る(十二段)

よへい 難與平。父は難波屋與左衛門と云ひて富豪なりしが漸く衰運に傾く。與平貧困の中に成長し、藤屋の遊女吾妻を戀慕し、吾妻の好意に感激し、吾妻の情夫山崎與次兵衛の敵兼屋彦介を斬付けて江戸に行き、大金を儲けて吾妻及び與次兵衛を救ふ(藤門松)

よへゑ 河内屋與兵衛。大阪本天満町河内屋徳兵衛が故主人の遺子なるによつて、總父は兎角遠慮し、又實母澤は夫に隠れて庇護するにより、我儘増長して遂に放恣無頼の徒となる。野崎親吉音語の途中、遊女小菊を伴へる會津者の郎九と喧嘩し、郎九に投げたる泥土過つて武士小栗八彌の馬に中り、八彌に陪從せる與兵衛の伯父山本森右衛門に罵打せらる。また妹おちちに言合めて病人の眞似をさせて親より金を奪はんとして、事露はれて自棄となり、亂暴して家を放逐せられ、口入業親屋小兵衛より日ぎりの借金の督促を受け、享保六年五月四日の夜、筋向ひの油商豊島屋お吉に無心を懇請して拒絶せられ、遂にお吉を殺して金を奪ひしが、捕吏に縛せられて千日の刑罰の露と消ゆ(女殺油地獄)

よへゑ 笠屋與兵衛。大阪北久太郎町古

道具商笠屋長兵衛の女お龜の養子なり。養父の妾お今及び其弟傳三郎に寵められ、養父に寵まれて家出せしが、お龜を養ひて立寄るを長兵衛お今に見付けられて益懸まれ、遂に寶永三年五月十七日の夜お龜と共に梅田堤に走りて、情死せんとし妻は死し、己は里人に助けける(卯月紅葉)

よもさく 與茂作。山城國西の岡原の土民なり。郎黨九郎右衛門、太次兵衛等十五六人と共に又次郎を訪ひ、又次郎の飼牛の玉を見て目度度しと云うて殺せしめんとせしが、又次郎の亡父の因果話を聞いて己等が亡父の善根を案ず(嵯峨天皇甘露雨)

よりかた 齋藤瀧口頼方。平重盛の家士にして、齋藤左衛門尉頼朝の子なり。養和元年九月北山に苜狩の御遊ありし夜、窓に建禮門院の侍女横笛と山中に密會せらる。加賀郡司師高に見付けられて悪評を立てられ、父に叱られて遁身の身となり、西彼と法名して嵯峨の奥住生院に引籠り、夜な夜な落外三味

を巡りしが、或夜舟岡山にて刈藪が岩村源五に斬られんとする場に出遇ひ、源五を欺きて刀を奪ひ、源五等を追拂ひ、刈藪を連れて去り、志賀の里に小庵を結びて刈藪及び其幼兒を養育せしが、是が夜左京之進義次・横笛を伴ひて來る。或は於て互に奇遇を喜び、志賀幸崎大明神に参詣し、師高に出遇うて之を捕め、義次と協力して師高の部下岩村源九郎・鎌須無藏を斬る。是時父の勝頼等重盛より召還の使者となつて來るに邂逅し、相共に都に上る(織歌加多末)

よりとも 源頼朝。保元亂に父の義朝と共に後白河天皇の軍に屬し、崇徳院方の兵と戦ひ、崇徳院方の大将となれる祖父爲義に逢うて、我首を刎れて祖父が功名となされたとし、爲義は敵手にかからんよりは孫に斬らるこそ幸なれと互に言合ひしが、是時義朝攻寄せ頼朝を連れて去る(鎌田兵衛名所丞)伊豆の住人伊東次郎祐近に預けられ、祐近の女八重姫と契つて千鶴丸をまうく。祐近平家の聞えを憚りて千鶴丸を殺し、頼朝をも害せんとす。頼朝遁れて北條時政に頼り、時政の女朝日の前と契る。女堂上人・頼朝を訪ひ、義朝の體態を見て旗上げを勧めて、平家追討の院宣を渡す。頼朝時政の助を得て兵を擧げ、まづ千鶴丸の意趣によつて伊東の館に攻寄す(頼朝伊豆日記)

よりみづ 攝津守源頼光。濱松のあたりに繁華盛衰せるを目前に寶劍を尋ね、家士渡邊綱を伴うて佐佐木山中に泊す。時に齡十八。其夜小系喜之介が亡父の仇物部平太を斬り、遁走して來るのを助けて、清原右大将高藤・平政盛の害手と戦ひ、綱に美濃路を指して落ち行き、高藤に讓渡せられて勅勘の身となり、美濃の能勢判官仲國に身を寄せ、美濃路をさうて之を家來となし、信州上野の山中にて山姥に遇うて身上話を聽き、其子快童

女藤の前・頼朝と通じて孕む。祐朝怒つて藤の前を法眼毒藥に預け、其生みし子を松川の水底に沈む。頼朝遁れて北條時政に頼る(源氏冷泉節)

よりのお 源頼信。河内守となり、源頼光の弟なり。院宣によりて伊豫内侍と婚す。鞍馬聖子の歸途を兎賊將太郎良門等に市原野に要撃せられて之を破る(關八州警馬)

よりひら 源頼平。多田滿仲の三男にして頼信の弟なり。出羽冠者と稱す。小蝶の蝶によりて詠歌姫と契り、詠落の途中、兎賊將軍太郎良門に脅迫せられて其一味となり、頼信主従の歸途を市原野に要撃して敗れ、渡邊綱に捕へられて死罪に處せられんとせしを、綱の伯母及び其田二郎纏に救はれて改心し、頼信・保昌等と共に良門・土蜘蛛を葛城山に攻めて之を退治す(關八州警馬)

よりのお 源頼信。河内守となり、源頼光の弟なり。院宣によりて伊豫内侍と婚す。鞍馬聖子の歸途を兎賊將太郎良門等に市原野に要撃せられて之を破る(關八州警馬)

よりひら 源頼平。多田滿仲の三男にして頼信の弟なり。出羽冠者と稱す。小蝶の蝶によりて詠歌姫と契り、詠落の途中、兎賊將軍太郎良門に脅迫せられて其一味となり、頼信主従の歸途を市原野に要撃して敗れ、渡邊綱に捕へられて死罪に處せられんとせしを、綱の伯母及び其田二郎纏に救はれて改心し、頼信・保昌等と共に良門・土蜘蛛を葛城山に攻めて之を退治す(關八州警馬)

よりみづ 攝津守源頼光。濱松のあたりに繁華盛衰せるを目前に寶劍を尋ね、家士渡邊綱を伴うて佐佐木山中に泊す。時に齡十八。其夜小系喜之介が亡父の仇物部平太を斬り、遁走して來るのを助けて、清原右大将高藤・平政盛の害手と戦ひ、綱に美濃路を指して落ち行き、高藤に讓渡せられて勅勘の身となり、美濃の能勢判官仲國に身を寄せ、美濃路をさうて之を家來となし、信州上野の山中にて山姥に遇うて身上話を聽き、其子快童

九の非凡の力量に感じて之を家来となし、坂田金時と命名して四天王の一に加へ、金時を先導として江州高懸山の悪魔を退治す。功を以て鎮守府將軍に任ぜられ、勅諭によつて岩倉大納言兼冬卿の女選湯姫と婚す(堀山姫) 多田滿仲の嫡子なり。勅命を受けて相馬二郎將門が執念の變化惡魔を射る。家督相續を頼信と定む。頼平が兇賊將軍太郎良門と一味せるを捕へて死罪に處せんせしが、頼平の乳母及び箕田二郎權の深く頼平を思へる心を憐んで罪を赦し、頼信・頼平・保昌等をして葛城山に良門・土蜘蛛を攻めて之を退治せしむ(關八州擊馬)らいくわうをも見よ。

よりよし 源賴義。性確直なりしがは平師氏の讒に遭ひ、賴勸の身となりて自殺せんとせしが、家臣平井清春等に謀められて思止り、渡邊武綱、坂田公時、平井清春等を従へて、京師を出で、落ち行く途中、平師秀の兵に長坂に襲撃せられて之を破り、若狭國小濱に赴きて連見列官唯光に便る(大掛物十幅一對)

らいろん 荒土佐坊雷雲。吉野坊主なり。総攝萬九郎の宅を襲ひ、萬九郎の妹長歌を奪ひて春登輝に奉らんとして擲めらる。後、夏仁親王を春日山に襲撃し、親王に化けたる神鹿を斬りて味方の兵に擲めらる(持續天皇歌草)

らいくわう 源頼光。武將なり。加藤兵衛氏綱來つて、其女横笛が北白川の廣文といふ浪人にかどはかされて、江州鶴山の遊郭ひらぎ屋長に賣られたることを訴ふ。是時頼光勅命によりて大江山の酒吞童子を退治し、其隣途四天王と共にひらぎ屋に行きて長を捕へ、其髮鬘を賣りて重罪に行ふ(傾城酒吞童)

子)「よりみつ」をも見よ。
らいげんほふし 雷玄法師。源義經の愛人東雲の叔父なり。平家の將監物太郎頼方と共に義經を追撃し、田村の官に戰つて死す(源氏烏帽子折)

らうく 郎丸。奥州會津者なり。大阪新地料理茶屋の女主人お龜と同じく天王寺屋の妓小菊を連れて野崎觀音に詣で、口三味線であかれ行く途中、「つ橋」あたりにて、河内屋與兵衛及びその友達等に惜氣喧嘩を仕掛けられ、與兵衛の友を毆傷し、與兵衛と撲ち合ひ組み合ひて共に川に轉落し、泥土を掴んで投げ合ふ、與兵衛誤つて通行の武士に無禮を加へて咎めらるる間に、郎丸は川を渡つて琴詣の諸人中に紛れ込み、小菊等を連れて去る(女殺油地獄)

らん 阿蘭。但馬城主の京都の邸に仕へてお節上げを勤む。或夜小萬の媒介によつて菱川源五兵衛と契る。後、比呂尼となりて薩摩に下り、芭蕉布商琉球屋に來り、源五兵衛に刀を投げられて怪殺す。琉球屋の娘お萬が源五兵衛の後を追うて裏扉を越えたる際、帶松枝に懸りてぶらさがる。お蘭乃ち布を松枝に投懸けて之を助く(薩摩歌)

らんぎよく 蘭玉。萬禮の妻なり。阿克將より剪の陳芝約を誘ふ書状と暗略を得て、其暗略を返し、書状を隠さんとせるを陳芝約に見付けられて羊に食はしむ。陳芝約これを不義の文と疑ひ、羊を割きて其書状を讀む。

其日甘輝 永感帝に從ひ來り訪ふ。蘭玉之を愛慮せんとし、他刀を研ぐを甘輝に疑はれて斬付けらる。後に萬禮の跡を尋つて東華島に渡る。或日甘輝尋ねて來る。蘭玉勇の仇と呼はつて甘輝と格闘す(國性爺後日合戦)

りうかくん 柳歌君。明の大司馬將軍吳三桂の妻なり。逆臣李昭天が總親兵を導きて帝及び華清夫人を弑すや、柳歌君即ち梅樞皇女を連れて海道の港に遁れ、敵の追擊軍と戰つて其將副將を殺し、皇女を舟に乗せて遁れしむ(國性爺合戦)

りかいほう 李海方。李昭天の弟なり。兄と共に反して魏羅に内通し、明を滅さんとす(吳三桂に殺さる 國性爺合戦)

りくあんわう 劉乃耶六安王。福建の國主なり。性暴戾にして苛政を行ふ。臺灣國せうほが池中より引上げたる大鼎を潰して寶劍を作らんとし、刀工を集めて刀を作らしめ、其利鈍を試すに無辜の民を斬り、歐陽蘇思が極諫せるを怒つて之を殺し其肉を鹽にす。皇一黃兵を繼ぐに及んで其臣歐陽哲を捕へ、鹽を出して汝が父の肉なるを告げて之を食はしむ。是時朱一貴の軍福建城に來襲す。六安王戰敗れて滅ぶ(唐船斬國性爺)(知府臺灣長官王珍政を怒り苛税を課し、民心離叛したるを傳聞御色したるなり)

りたふてん 李踏天。明の右將軍となりて反逆を企て、魏羅を襲きて思宗列皇帝及び皇后華清夫人を弑し、皇族思臣を亡して自ら國王となる。後、南京城に於て國性爺等に襲撃せられて敗れ、捕はられて酷刑に處せらる(國性爺合戦)

りゑもん 大文字屋利右衛門。大阪

備後町の鍛冶職なり。手代平兵衛かねて悪所狂ひをなすを知つて案ぜらる。平兵衛が藤多の寶箱の裏金を誑合へるを怒りて之を放逐す(心中又は水の朔日)

りん 林。河内國道明寺の老尼なり。或日虛無僧來り和琴の前を預けて去る。尋いで龍門家の後室及び舞樂の前來つて此寺の尼となる。是時石川五右衛門幼兒を賣買ひて寺内に監込み、大釜の中に醜れしを官人追及して縛し去る。是に於て林は龍門家の後室等と共に刑場に行き、幼兒の赦免を哀訴す(傾城吉岡梁)

るりせんぢよ 瑠璃仙女。林丹の妻なり。須達長者の下女となりしが、佛法を信ずるの故を以て放逐せらる。釋尊頭陀の道に遇うて實の一燈を挑げ、遂に佛果を得(釋迦如來誕生會)

れいせい 冷泉。浮瑠璃御前の乳母なり。浮瑠璃御前と牛若との情事につきて斃旋す(孕常盤)

れいせい 冷泉。浮瑠璃御前の乳母なり。浮瑠璃御前の侍女なり。姫と牛若との情事に就いて斃旋す。後、姫に従ひて塚の藥師の笹舟に隠れたるを、藤太に見付けられて斬られんとしたるを三條の吉次僧高に助けらる。また牛若に逢うて浮瑠璃御前の死を語つて悲しむ(十二段)

れうくわう 扇屋了空。大阪新町九軒町の